

障害者の気持ち



幡羅中学校2年 大野 裕里佳

私は、町中などで障害のある方をみかけることは、ほとんどありません。でも、テレビなどで見て、「かわいそうだな。でも、自分はなんでもないからよかった。」とよく思うことがあります。でも、大きくなって、自分も障害者という立場になってしまつたら、そういうふうに見えるのは、きつと、いやだと思えます。実際、私は障害者ではないので、本当にそう思っているかは分かりませんが、きつと、「どうして、障害のある人と、障害のない人をくらべて、安心するの？今は、障害があつても、前は、ふつうに暮らしていたのにどうして、くらべるの？」と、きつと考へると思えます。同じ人間どうしなのに、人は自分より弱い人を見ると、自分はなんでもなくてよかったと、人と人をくらべて、安心します。いくら気をつけていても、その言葉は、とっさに浮かんできます。私だって、そういうふうには思つていません。でも、障害のある人は、自分なりに、自分だけのやり方で、周りの人がどんなふうにも思つていても、楽しく生活しているのだと思えます。

「私の生活は、ふつうの人と変わらないよ。」と言っているように聞こえました。障害があるとは思えないくらいに元気で、生き生きしていました。たとえ障害があつても楽しく暮らす生き方があると思えます。障害のある人は、「障害がない人はいいな。」と、うらやましく思つているかもしれないですが、障害を乗り越えてそれでも、前向きに考えられる人は、たとえ障害があつたとしても、強い人だと思えます。障害者だからって、弱く見てはいけなないと思えます。本当は、だれよりもつらく、苦しい経験をして、それを乗り越えた結果、健康者の人たちより強い人も多いと思えます。これから私たちは、人の気持ちを考え、人と人とをくらべることは、絶対にしないようにしたいです。障害者だけでなく、自分の周りにいる友達などにも、相手の気持ちを考えて話すことが大切だと思えます。こういう言葉を言つたら、相手は、傷つくだろうか、こういう言葉を言えば、相手が喜ぶだろうかを考へることは、「人の気持ちを考へること」だと思えます。自分は、ふざけて言つた言葉も、相手にとっては、胸につきささるほど、いやな言葉かもしれない。話すときは、まず人がどういう気持ちになるかを考へてみるのがいいと思えます。みんな一人一人、心を持っているし、一人一人感じ方もちがいます。人の気持ちを少しでも考へれば、友達とも仲良くなれると思えます。「まずは、相手の気持ちを考へる」という言葉を忘れずに、少しでも人権のことについて考へたいです。

夢

なかるべからず

藤原 敬典 さん

格闘のフォームに魅せられて



総合格闘技

格闘技は、技と技のぶつかり合いであり、練習で身につけたテクニクを如何に発揮できるかを競うものだ。それは相手が誰であろうとも関係はない。それ故に格闘技の中でも

最も過酷といわれる総合格闘技の世界では、相手への感情移入は時としてウィークポイントになりかねない。しかし、その気持ちを大切にしながら頂点を極めた青年がいる。zstバンタム級王者 藤原 敬典 強さの基になる、その何倍もの温かさを持ち合わせている。

Book

ふかや必読書30



『世界がもし100人の村だったら』池田 香代子 「いま世界には約63億人の人間がいます。それを100人の村に縮めたらどうなるでしょう。」の問い掛けから始まるこの本。あなたの「世界を見る目」を開いてくれるでしょう。

感想 みんなの 深谷中学校2年 森田 拓也 さん

世界には、六十三億人の人がいますが、それを百人の村に縮めると、違う世界が見えてきます。色々な人がいるこの村では、人種の違い、貧富の差、自分と違う人を理解し、受け入れることが大切だそうです。僕も、この本のように自分以外の人を認め、理解して生活していきたいです。誰もが、このようにできれば戦争をせずに平和な世界になると思えます。そして、この本を通して、自分が幸せであることに気づくことができました。

Letter

ありがとうの手紙



優秀賞 小学校高学年の部

おとうさんへ

岡部西小学校5年 (現6年)

豊田 杏優 さん

毎日朝早くから、夜おそくまでお仕事ご苦労様です。

私は、十一才になりました。私の名前にちなんで「あんず」の木を私が生まれた時に、庭に植えてくれたお父さん。今ではその木も私の身長より、高くなり、毎年大きな実がなります。

いろいろなことがあった十一年間でしたが、「あんず」の木にまけないように、がんばろうと思います。「おとうさん」これからも、よろしくお願ひします。

いつも、ありがとう、お父さん。

力の限りを尽くす

闘 いには小学生の頃は余り興味があつた。テレビゲームでも、むしろキャラクターのフォームに関心を持つた。勿論スポーツも得意で、幡羅中ではバレー部、本庄高校に進学してからは体操部に入学したが、将来をスポーツに賭ける考えはなかつた。

卒業後、プロの造形家を目指し、美術専門の学校に入学した。

学内でメキメキ頭角を現し、テレビや映画撮影用の特殊造形を制作する会社に職を得た。



藤原自身が作ったリング用のマスク。今も造形会社に勤め日々制作に携わっている。

造形に自身を投影していたが、プロになるとクライアント

の意図が第一だ。いつしか、自分自身を如何に表現する術があるか模索していた。

そんなある日、友達に誘われ、総合格闘技の道場を目にした。初めて見たプロのリングには、全身を使い、技を駆使し、

力の限りを尽くす格闘家たちがいた。これだと思つた。

温かさの礎

技 ありの右オーバークラッシュがクリーンヒットして相手が後退。好機を逃さず左右のフックでラッシュを浴びせ勝負を決めた。総合格闘技界の新星zst(ゼスト)初のバンタム級王者誕生の瞬間だ。

常にコーチがいるわけではなく、一時期はサンドバックもない環境で練習をした。環境は関係なく、自分で考へ行動することが大切と痛感している。

将来は深谷に格闘技の道場を設立したい。格闘技を通じて痛みを知り、痛みをわける人が増えて欲しいと願う。それが「温かさ」の礎になるのだから。

夢七訓

- 夢なき者は理想なし
理想なき者は信念なし
信念なき者は計画なし
計画なき者は実行なし
実行なき者は成果なし
成果なき者は幸福なし
ゆえに 幸福を求めざる者はず
夢なかるべからず※

(本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています)